

第三講 一九八二年二月十七日①「統治性と自己」 他

ミシェル・フーコー講義集成 < 11 > 「主体の解釈学」(2)

(コレージュ・ド・フランス講義1981-82)

ミシェル・フーコー著 廣瀬 浩司・原 和之訳 筑摩書房 (2004年)

2025年10月28日 ぱんこ

前回の話、『アルキビアデス』からの解放

『アルキビアデス』

自己への配慮 (the care of the self) をはじめて理論的かつ体系的に表明した

- どのように『アルキビアデス』の作品の条件から、自己への配慮という主題が解放 (separate) されたのか？

< 解放の結果 > 「自己に配慮すること」は...

- 1：人生全般にわたる規則となった (特定の時期ではなくなった)
- 2：主体という存在の全てに関わるようになった (特定の身分や地位の獲得結びつかない)
- ここで、自己への配慮の新しい概念が誕生する
- 前講義ではこれを、**自己への立ち回り (conversion to oneself)**、として説明していた
→主体は自分自身に完全に向かい、自分自身に身を捧げなければならない (The whole subject must turn around towards himself and devote himself to himself)

自己への立ち回りの構成要素

- 例) ギリシア語とラテン語の表現
自己に立ち戻ること、自己に帰ること、自己に戻ること
(return to oneself, revert to oneself, review oneself)

< 2つの本質的な構成要件 >

- 1：この表現全てには、主体が自己に対して行う現実の運動という観念が含まれる
 - 単に視線を向ける、注意する、ではない
 - 現実に移動すること、主体が自己に対して行うある種の移動のこと
 - 注目する点は、移動 (shift)、軌跡 (trajectory)、努力 (effort)、運動 (movement) など
- 2：立ち戻ることの意味とは？
 - 解明すべき2つの主題：移動 (movement) と回帰 (return)
 - 自己への立ち回りとは自己への回帰について、比喩がある
→航海の比喩
 - 1：航路
ある点から別の点へ実際に移動する

- 2：港、停泊所
安全な場所という目標がある
- 3：母港（homeport）
生誕の地や祖国を再発見する
- 4：危険
未知・既知な危険があるからこそ安全な場所を願う
- 5：操舵（そうだ）
危険な海を渡るための、観照的かつ実践的な複合知あるいは推定知
 - 操舵に結びつけられる、3つの技法
 - 1：医術（治すこと）
 - 2：政治的な統治（他者を導くこと）
 - 3：自分自身を導き、統治する技術（自己をみずから統治すること）
 - 古代ギリシア人とローマ人は、この知と実践の間に、テクネー（an art、術知、一般的な原則や概念に関する、反省的な実践のシステム）を見出していた
 - 16世紀まで、こうした比喩が見られる
→16世紀には新たな国家理性により統治術が位置付けられるも、これは自己の統治と医術と他者の統治と、ラディカルな形で区別されていた
 - 異教の時代とキリスト教時代初頭までは、自己は目的として、不確実だけれども航路の終着点として、人生という危険に満ちた航路の最終地として現れる

自己への回帰の歴史的的重要性

- 自己への回帰が西洋文化においてどのような特殊性があるか
- 1：キリスト教は、霊性の主軸をなすものとして自己への回帰という主題を排除や拒否している
 - 原則として、キリスト教的修徳主義は、自己の放棄（self renunciation）が、来世の生、光、真理、救済などに到達できるための本質的な契機を形づくっている
 - 自己救済の追求が自己放棄をその根本条件としている
 - 自己へは神に沈潜し、その同一性、個性性を喪失し、紙との特権的かつ直接的な関係によって、自己という形式における主体性を喪失する
 - 自己への回帰の主題は、キリスト教に敵対する主題であったというより、むしろそこで取り上げ直され、組み込まれているものだった
- 2：自己への回帰は、16世紀「近代」文化において、絶えず回帰する主題だった
 - しかし、自己への回帰の主題は、断片的できれぎれの状態で作再構築されたが、ヘレニズム・ローマの古代における包括的かつ連続的なあり方で再構築されなかった
 - 私たちの近代世界においては、ヘレニズム・ローマ時代のように、自己への回帰の主題が支配的になることはなかった
 - 16世紀、19世紀などの多様な思想や美学が目指す問い
...自己の美学を構成したり再構成したりすることは可能なのか。それは何を

代価として、どのような条件においてなのか。自己の倫理と自己の美学は、体系的な自己の拒否へと逆転するのか。

<本書の問い>

「自己へ回帰すること」「自己を解放すること」「自分自身であること」「真率（しんそつ）であること」などといった表現は、私たちにもなじみ深いものですし、私たちの言説を貫き続けています。

しかし、こうした表現に与えられる意味、というよりはむしろ意味のほとんど完全な欠如について考えてみましょう。

今日も使われているこうした表現のそれぞれに意味や思想が欠如していることを反省してみると、今日の私たちは、自己の倫理を再構築しようとしているとはとても言えないような状態であることがわかりでしょう。自己の倫理を再構築しようとする一連の努力は動きを止め、凝固してしまっています。この努力の中で、今日の私たちは絶えず自己の倫理を参照することを強いられているのですが、それにいかなる内容をも与えることができない。

私は、こうした動きの中に、自己の倫理の再構築が不可能であると感じさせるような何かを見てとらなければならないのではないかと考えています。しかし、自己の倫理を構成することはおそらく緊急かつ根本的な課題であり、政治的にも不可欠な課題なのです。

p.294より

- 権力（power）の問題、政治権力の問題を、統治性（governmentality）という、もっと一般的な問題の中において考え直すということ
 - 統治性という言葉で、権力の諸関係の戦略的領野（a strategic field of power）を考える
 - 権力も、単に政治的な意味にとどまらない、もっと広い意味で理解する
- 権力の諸関係の流動的で、変更可能で、逆転可能な側面に注目する
 - 統治性の概念は、理論的にも実践的にも、主体という要素を経由する
 - 制度としての政治権力の理論は、法的な主体の法律上の概念に基づいている
 - ↑
↓
 - 統治性の分析（逆転可能な諸関係の総体としての権力の分析）は、自己の自己への関係によって規定された、主体の倫理に基づかなければならない
 - 「権力」「統治性」「自己と他者たちの統治」「自己の自己への関係」の4つ
 - 連鎖し網目のようにつながっている
 - これらの概念を中心に政治の問題と倫理の問題を連結することができる

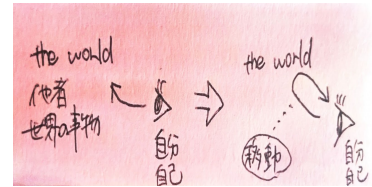
自己への立ち返りと自己認識の関係とは

- 前回提起した問題に戻ると...

今話している時代において、自己への立ち返りの原則と、自己の認識（自己を知ること；self-knowledge）の原則を結びつけている関係性とは何か

- ある時期から「自分自身に配慮すること」という教えは、広がりや一般性を持つようになり、ラディカルで絶対的な性質をおび始める
- この時期以来、「自己に立ち返る」という教えは、視線、注意、精神の切先などが、他者や世界の事物から自分自身へと、部分的ないしは全体的に移動していくということを含意するのではないか？

これまで説明してきたもの（自己への配慮/自己への立ち返り）は、こういうこと...？
これが起きた時に、自己の認識という点はどうに関わっているのだろうか、という流れ？



- ↓
- 根本的には、「自己に立ち返ること」は自分自身を対象として、認識の領域（knowledge, connaissance）として構成することを含意するのではないか？
 - 歴史的には、自己への立ち返りというヘレニズム・ローマ的教えの中に、後にリスト教世界や近代世界で展開するようなあらゆる実践と認識の起源となるような点、それらがはじめて根付いた地点を見出すことができるのではないか？
 - この教えに、後に精神の科学と呼ばれるもの（心理学や意識の分析、プシュケの分析など）の最初の形式を見出せるのではないか？
 - キリスト教的な意味そして近代的な意味での自己認識は、ストア派、エピクロス派、キュニコス派（犬儒派）などのエピソードに根付いているのではないか？

※

- 自己の実践として当時構成されていたものは、今日の私たちが理解している意味での自己認識ではない
- キリスト教的な霊性が理解するような自己認識でもない

<問い>

- これらの現象の総体と、私たちの「文化」と呼びうるような歴史的プロセスをとおして、一体どのようにして主体の真理（the truth of the subject）の問題が形作られることが可能になったか？
- 主体について真実の言説（true discourse）を語ろうと企てたのは、一体どのようにしてなのか、それはなぜなのか、一体どのような代償を払ってなのか？
- 主体には、3つの形式がある
 - 1：狂った主体。非行者としての主体。
 - 2：私たちが一般にそうであるような主体。その時私たちは語り、労働し、生きている主体。
 - 3：私たちが私たち自身に個人的に直接向かっているような主体。特にセクシュアリティはここに当たる。
- これら3つにおける主体の真理の構成、という問題を提起してきた
- （注釈より）「主体について真実を語るといふ命令が発せられるためには、一体どのような特殊で歴史的な変容に、主体は従わなければならなかったのか？」

- ヘレニズム・ローマの文化で、自己への配慮が自立した技法となり、それ自身の目的性を持って生存全体を価値づけるようになった
→この瞬間こそ、主体の真理の問題がかたちづくられ、表現されるような特権的瞬間なのではないか？

混乱しやすいポイント

- 自己への配慮（自己の立ち返り）と、自己の認識という2つの大きなモデル、2つの大きな図式が存在している点
＝ヘレニズム的モデル、と呼ぶことにする
- ヘレニズム的なモデルを、エピクロス派と犬儒派から分析する
- ただし、ヘレニズム的なモデルは、後にプラトン主義的モデルと、キリスト教的モデルによって包み隠されてしまうことになる。この2つの他のモデルとは区別をしていく。

プラトン主義的モデルとキリスト教的モデル

- プラトン主義的モデルとは？
＝想起のモデル
 - 『アルキビアデス』を使った図式的検討
 - 自己への配慮と自己の認識の問題は、3つの重要な点から成立する
 - 1：自己を配慮しなければならないのは、ひとが無知だから。無知の発見、無知の無知の発見。
 - 2：「自分自身を知る」。自己の認識は、魂が自分自身の存在を把握するという形をとる。鏡の中の自分を認識して、自己の存在を把握する。
 - 3：以上より、自己への配慮と自己への認識の接点にあるのが、想起。魂が自分の存在を発見するのは、自分が見たものを思い出すことによって。
 - 自己の認識と真実を知ること、自分への配慮と存在への回帰が、魂の一つの運動の中で合流し、まとめられている
- キリスト教的モデルとは？
＝釈義のモデル
 - 「修道院的・修德的」モデル
 - 1：自己を知ることと、真理を知ることと、自己への配慮の関係は循環的
(天国で救われたいなら、＜聖書＞や＜啓示＞の真理を受け入れなければならない→真理を知るには、心を浄化するような知として自分自身を気遣う必要がある→浄化するには＜聖書＞＜啓示＞の真理と根源的な関係が必要→...)
 - 2：自己の釈義（意味をときほぐし、明確にすること）
(内的な幻想や、魂と心の内部の誘惑を認め、失敗させなければならない。魂の中に広がる密かなプロセスや動きを解読する方法が必要)
 - 3：自己の放棄
(自分自身に帰るのは、本質的かつ根本的には自己を放棄するため)

- なぜこの2つのモデルが光を放っていたのか
→2つのモデルが、キリスト教の歴史の最初の数世紀の間、互いに対立していたから
 - プラトン主義的モデル...グノーシス派の運動（キリスト教的にフロンティア、境界とも言える）
 - 存在の認識と自己の認識は同じであるという考え方。
 - 自己へ回帰することと、真実についての記憶を取り戻すことは一つのことである
 - 主体による主体の存在の想起
 - キリスト教会は、釈義的モデルで対抗することに（意図してグノーシス派と距離をとっている考え方でもある）
 - 魂の中に生まれる内的運動の本性と起源を探り出すという釈義的機能
 - 主体による主体の釈義

第三のモデルの位置付け

- キリスト教的モデルと、それに唯一対話できたプラトン主義的モデル（キリスト教的モデルは、プラトン主義的モデルと闘ったり、逆に取り込もうとしたりした）
- この2つのモデルの間に、第三の図式がある＝自己の技法
 - 1：自己への配慮を強調し特別視し、自己の認識の自立性を確保しようとしてきた（←→プラトンにおける自己への配慮と自己の認識の同一視）
 - 2：自己を達成すべき目標としてきた（←→キリスト教における自己の放棄）

「プラトン主義」モデル；想起

「ヘレニズム」モデル；自己との関係の自己目的化（self-finalization）

「キリスト教」モデル；自己の釈義と自己放棄

- ヘレニズム的モデルは、ある道徳の形成の場だった
- ちなみに、キリスト教は宗教であり道徳がなかったはず→このヘレニズム的モデルを取り込み、練り上げ、私たちが誤って「キリスト教道徳」と呼ぶものができている

ヘレニズム的モデル

- 自己認識の役割は何だったのか？
- 自己の認識が「自己への立ち返り」という命法において根本的な主題なのか？
- 犬儒派の文献（デメトリオスの文章）や、エピクロス派の文章から考えてきた
 - 1：自己を知ることは、自然を知ることと比べると、選択肢になりえてなかった（be not an alternative）（＝自然の認識と対比して浮かび上がるものではない、ということ？）
 - 私たちが知るべきものは、＜自然か、それとも私たち自身か＞ではなかった
 - 2：「自己への立ち返り」は、自然を知るための一つの手段だった

- ストア派の文章から、自然認識の問題考えてみる
※ストア派では、無益な知に対する批判の伝統がある。また、かなり過激な自然認識も行われていた
- ストア派は、道徳 (morality) ・ 論理学 (logic) ・ 自然学 (physics) の3つを強力な体系におさめている
- この3つは、それ自体一つの宇宙論や世界の秩序に関する思弁全体に結びつけられている
- よって、ストア派は理論的な命題とは別に、認識という企て全体 (scientific projects) に事実上あるいは実践的に結びつけられている
- ストア派は、一方では全ての知をtekhne tou biou (生の技法) に従って組織し、自己に視線を向け直すことが必要だと主張する
- 他方では、視線を自己に向け直すことを、世界の秩序、世界の一般的・内的な組織全体を党派することに結びつける
＝自分自身に目を向けると同時に、世界の秩序を踏破すること
→この時、ストア派は何を言えるのか？
... 2つの文章から考える (セネカの文章/マルクス・アウレリウスの文章)

ストア派の考察――セネカ『自然研究』

- 世界の百科全書的な知を実践しようとしている文章
- 『自然研究』 *Natural Questions*
 - このいくつかの巻には、ルキリウスへの手紙が添付され、序説になっている
 - 同時期に『道徳論』も執筆している
 - 空と大地、惑星の運行、河川の地理、火の説明、彗星など、広大な世界が踏破されている
- 第三巻序説にて
「いったい私はいま何をしているのだろうか、こんな本を書くことは、今の時点でいったい私にどういう意味があるのだろうか」
 - 1：世界中を踏破することを、今やっているのだ
 - 2：それは、世界の原因と秘密を探し出す (investigating) ことである
- このことはどんな意味を持っているのか、セネカの文章は4つの運動に分割できる
- 1：年齢の問題
 - 「この私は老人なのだ」
 - すでに触れてきた主題；人生が完成するような地点（＝人生の充実期）に急いで到達しなければならない、一気に駆け上がらなければならない
 - しかし、セネカは無益で無駄な (pointless) 研究などに時間を費やしてしまったという
 - 時間を浪費したため、苦労 (labor, work) を速度を早めて行わなければならない
 - 1：急いで行わなければならないものとは？
 - 遠い所有地ではなく、最も近い所有地（＝自分自身）の世話をしなければならない
 - 人生最後の地点に私たちを導くこの時間の運動において、私たちは視線を向け直し、自らを観照（＝対象の本質を客観的に冷静にみつめること）の対象としなければならない

- 2：では、何を気遣うのはダメなのか？
 - 遠ざけるべきは、歴史的な知
 - 異国の王、その冒険、手柄、征服について
 - 王の賞賛や、苦しみ話になってしまう
 - 歴史家たちのように他人の苦難を話すくらいなら、自分自身の苦難を乗り越え、それに打ち勝つ方がましだ
 - 歴史家のように、何がなされたかを研究するよりは、なすべきことを研究した方がよい
- 3：歴史家たちの物語を読むと、偉大なものの取り違えをしてしまう
 - 人間の真の偉大さについて勘違いし、もろく儚い勝利にこそ人間の偉大さがあると思ってしまう
 - こんな勝利など、常に不安定な運命によってもろく崩れ去ってしまう
 - 対して、セネカは歴史的なexemplum（規範、範例、範型）が持つ真の価値を強調する
 - 偉大さの真の特徴は、華々しさや牽制といった目に見える形式ではなく、自己を支配するという個人的な形式でしかない
- 4：では、いったい何が真に偉大なのか？
 - 人は何を努力すべきか
 - 1：悪徳に打ち勝つ＝自己の支配
 - 2：苦境や悪運の中でも、心をしっかりと平静に保たなければならない
 - 3：快楽と戦わなければならない
 - ...伝統的な闘争方式がある
 - 1：悪徳を改めるための内的な闘争
 - 2：外との闘争
 - 3：逆境や享楽の誘惑との闘争
 - 4：はかない富を追求しないで、前なる精神を追求することこそが偉大なことだということ。自分の精神の中に、自分の魂の資質の中に、目的を、幸福を、究極の富を見出さなければならない
 - 5：自由にこの世から去り、舌の先に魂を持つこと
 - 4：自己との関係に必要な資質と充実を獲得すること、つまり死を準備すること

<次の問い>

- 老人になり、自分自身のために、自分自身に向けて急いで仕事をしなければならなくなった時にすべきことは何か、という議論と、『自然研究』という著作でなされている分析全体とは、どのように両立するのだろうか？
 - 「さて、私は老人であるというのに、世界を歩き回り、世界の原因と秘密を引き出そうとしている」
- ストア派の伝統的な道徳性が立てる目標が、認識や自然認識と両立可能であるばかりでなく、こうした認識を代価にしてのみ到達可能であることを示す
- こうした自然認識は世界全体の認識でもある
- **ひとは、世界の偉大なる円環を廻ってはじめて、自分自身に到達できる**

【コメント】

- 読んでいて今更ながらの気づきだが、ただ自己に視点を向けるのではなく、世界や他者への視線を自己へ向けるという移動、行程、順番、ここに自己への配慮の最大のポイントが隠されている可能性があるのではないか、と思った。そういう意味で、他者・世界・社会を必要とする議論なのだった。
- この順番（外に向け、内に移動させる）があるから、自己への配慮という議論の次に自己認識の話が来ているのだ、と整理してみた。3つのモデル全てにおいて、立ち返りという動作はあるものの、そこにおける自己認識には大きく違いがあるのだという議論のように読んだが、合っているだろうか？
- しっかり説明されていなかったからかもしれないが、これまで読んできている中で、ヘレニズムのモデルとプラトン主義的モデルを混在して捉えてしまっていたことに気がついた。
- 他者から規定される社会関係ではなく、自己から始まる自己への関係性という点で主体が3種類もあるというのが、時代は昔であるものの新鮮すぎる議論で衝撃だった。ただ、この分類は今回の講義では放置されてしまったので、どう生きてくるのかはまだわからない。
- truth真理の意味が難しかった。falseの対義語としてのtruthというだけではなさそう。もう一步真理truthの理解を深めたい。
- 自然（nature）の意味がもう一步明確に捉えられていない。世界・他者よりももっと特定の何かを指していることは明らかである。運に左右されないような、例えば scientific projectsとか、physicsとかが近いのではないかと捉えた。つまり、数学的、図式的、構造的、総じて論理・科学とも言えそう？
- 今まで講義集を読んで、引用文献を読んでみたいと思い実際に調べるに至れなかったが、セネカの『自然研究』はとても読んでみたいと思えた。